

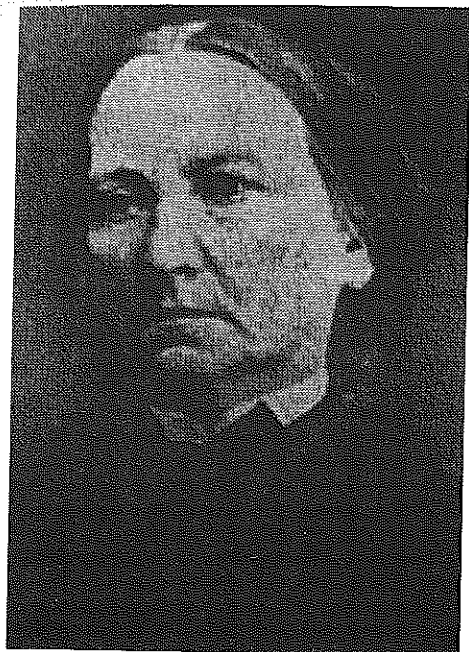
コンセプション・アレナール

——愛と徳に生きる

ロサ・フェルナンデス・ウルタスン
ナバラ大学教授

人物と事歴

コンセプション・アレナールは、一八二〇年一月三十一日、ラ・コルーニャ県のエル・フェロールに生まれた。父親ドン・アンヘル・デル・アレナールは、護憲派の進歩主義を唱えるアルマーニヨ生まれのカンタブリア人である。ドン・アレナールは、スペインの民衆が決起してナポレオン軍と戦った独立戦争のさなかに、志願して兵役に服した。彼は、兵士としての能力が評価されるや、時を待たずして軍曹をたばねる連隊長に昇進し、コンセプションが誕生した年には、ガリシア中央政庁の政務官に抜擢さ



れた。フェルナンド七世が専制君主の座につくと、反体制派は冷酷な抑圧にさらされ、ドン・アレナールも身柄を拘束されて迫害を受け、追放の身となった。そのことが彼の死期を早め、数年後の一八二九年、彼は世を去る。娘アレナールの人間の苦悩についての理解は、彼女の記憶に残る父親の姿に負うものであったと思われる。母親ドニャ・マリア・コンセプシオン・デ・ポントは貴族の家柄に生まれた。彼女の兄弟にはビーゴの伯爵もいた。母親マリアは、夫の死後ほどなくして、二人の娘アントニアとコンセプシオン（ルイサという名の末娘もいたが幼少にして他界）を伴いマドリッドの実家に移り住むことを決意する。当時、実家の暮らし向きは良く、同家はイサベル二世の宮廷に出入りする貴族の面々とは血縁関係にあった。王室とも結び付いたこのコネクションは、アレナール家の娘たちにも最良の門戸を開いてくれるものと思われた。

コンセプシオンは良家の娘たちが通う学校で教育を受けた。ところが当時の女子教育はコンセプシオンの知識欲を満たすはくれなかった。彼女は、満たされない思いのはげ口を読書に求め、手当たり次第に書物を読みあさった。コンセプシオンは、生まれつき感傷に走る性分ではなかった。彼女は自分のことを改革主義者ならびに進歩主義者と見なしたのである。そんな彼女でも、多感な頃には詩の魅力に引き寄せられた。けれども彼女の好奇心は、浮世の世界に向けられているだけではなかった。コンセプシオンが若くして法律や社会の問題に関心を寄せるようになったのは、ふだんから読書と学習を怠ることのなかった彼女の人の人となりによるものであったといつてよい。

高まる知的向上心は押さえがたく、そのうちコンセプシオンは大学の法学部への進学を志す。しかし彼女のこの志は、母親の猛烈な反対に遭い、ただちに実現を見るにはいたらなかった。母親には学問は本来女性が担うべき仕事ではないと思われたからである。一八四三年、コンセプシオンは暗れて大学の門をくぐるが、それは母親の死を見届けてからのことであった。コンセプシオンは男装して大学に通った。時には政治の討論会や文人の集まりにも男性になりすまして出席した。

大学に通うさなか、弁護士でありジャーナリストであったフェルナンド・ガルシア・カラスコと知り合い、一八四七年、二人は結ばれる。フェルナンドは、戦う姿勢を貫く妻コンセプシオンの心情を温かく受け止め、そして理解することのできる人物であった。二人は、フェルナンドが肺結核で死亡する一八五七年まで、日刊紙「ラ・イベリア」に共同で記事を書き連ねた。夫に先立たれたコンセプシオンは、息子たち（彼らの内で長じて生きながらえたのは父親の名を受け継いだフェルナンドただ一人であった）を引き連れてマドリッドを後にし、父親の生まれ故郷アルマーニョに向かった。コンセプシオンの最も充実しかつ成熟した日々の活動はこの地で始まる。若くして社会の問題と向き合い始めたコンセプシオンは、この地において、知識人ならびに専門家として、人道的救済事業に身を委ねる一歩を踏み出す。ここでは自ら主催した慈善救済活動を推進する。その傍ら執筆活動にも専念し、随筆の手法を織り交ぜた当時の作品は、たちどころに多くの読者を得る。

その後コンセプシオンはアルマーニョを離れ、一時オビエドで過ごした後、ポッセスに落ち着く。この地において、一八六〇年、彼女は著名な音楽家サルナウと協力して、聖ビセンテ・デ・パウール会議をスペインで初めて主催した。会議のために執筆した彼女の著書『貧者の訪問者』は、時を待たずして五つの言語に翻訳された。同会議から二年後、スペイン王立学士院政治倫理学会は、一八六一年に出版された彼女の随筆集『慈善と博愛と福祉』に学会賞を授与した。女性の受賞はそれまで前例がなく、彼女の受賞は同学会の歴史を飾る出来事となった。この間、コンセプシオンはフェルナンド・カストロがマドリッドに設立した「女性文筆家協会」の運営委員に迎えられ、また一八六三年には、彼女を顕彰するために新たに創設された「女性受刑者の慰問者」の称号を授かる榮譽にも輝いた。ラ・コルーニャに居を構えたおりに、三カ月をかけてガリシア州内のすべての刑務所を訪ねて回った。

一八六八年、コンセプシオンはスペイン全土に散在する女性受刑者のための更生施設の監督官に任命され、その職務を五年間全うした。その後、三年の月日を経て、アントニオ・グエロアと協力して雑誌『愛徳の声』を世に送り出す。コンセプシオンは十四年にわたり同誌に記事を書き続け、社会にはびこる悲惨な状況を世に知らしめる。一八七二年、コンセプシオンは「福祉建設」と称する博愛団体を立ち上げる。この団体の設立の趣旨は、労働者に

安価な住宅を供給するためであった。またカルリスタ戦争で負傷した兵士たちの治療が急務とされた時に、スペインで赤十字の活動を組織したのはコンセプションであった。スペイン赤十字社は、一八七一年から翌年の七二年にわたり、彼女を組織の総裁に迎えた。カルリスタ戦争のさなかには、エプロ川沿いの前線地帯に出かけて行き、数カ月にわたってミランダの野戦病院でボランティア活動に従事し、負傷兵には、護憲派であれカルリスタ派であれ、個々の主義主張にかかわらず分け隔てのない治療の手をさしのべた。グループで医療に携わる組織や団体は人間の苦悩や苦しみに立ち向かい、患者の治療、衛生ならびに精神科による医療扶助、保健ならびに女性の役割などといったことに対し、医療と看護の側面からかわることを使命とする。これらの分野でコンセプションが成し遂げた功績は、十九世紀の最も聡明な知性を立証する一つの事例として、看護医療の歴史にその名をとどめる。

一八七五年から一八八九年の間、コンセプションはヒホンの町に居住し、彼女の代表作を書き上げた。この時期の作品『国民の教育』は、王立学士院政治倫理学会の一八七八年度懸賞募集作品に選ばれるが、作品の出版は一八九六年まで差し控えられた。コンセプションは晩年をビーゴで過ごし、一八九三年二月四日、同地で永眠した。彼女の墓碑には「徳と命と学問に捧げる」と記されている。

コンセプションの思想の特徴

コンセプションが果たした役割を彼女が生きた時代の歴史的背景の中で理解するには、さしあたり十九世紀の女性たちの生活がどのようなものであったのかについて述べる必要がある。近代の生活様式は、中世に女性たちが果たした役割とは異なり、女性を政治と経済と文化にかかわる活動から切り離し、彼女らを家庭内に閉じ込めてしまうことを前提として出発した。十九世紀の初頭には、女性には選挙権が与えられず、公的な仕事に就くことも許されなかった。また経済生活の面でも女性は差別にあえいだ。当時女性には財産の所有権は認められず、妻は自分の実家から相続した財産でさえも夫に譲渡しなければならなかった。公私にわたる商い、専門的な職業、銀行勘定の

開設、さらには金子の借り入れなどといったものも女性には許されなかった。当時の民法は女性の立場をいぢりしく規制するものであった。こうした法制度の下では、女性は親と夫にすべてを委ねて生活する以外に道はない。女性の法的立場は未成年者か幼子のそれとなら変わりはない。教育でも女性は差別され、とりわけそれは高等教育において顕著であった。女性の非識字率が高めに推移したのは、教育の施策が女子には十分に行き届かなかったためである。ひとたび女性たちが安定したくましい家庭を築き上げる手段や方法を身につけると、その方面における女性の影響力は力を増し、社会全体に動かしがたいものとして定着した。社会慣行や宗教的価値観を守り伝え、子供を教え導き、地域社会の奉仕作業や援助活動を支えるのが女性の仕事だと見なされるようになった。このような時勢にあっても、高い教養を身につける女性たちはいた。それらの女性たちの中から、文学、芸術、人文学の分野に影響を及ぼす人材が現れる。当時は、教育、専門職、司法、行政などの分野で性による差別が最も著しかった。こうした事態を深刻に受け止め、改革の必要性を迫ったのは、文学、芸術、人文学に携わる知識人の面々であった。女性のための教育は、結婚して母親になるためだけにあってはならず、それは女性の個性の成長をも促すものでなければならぬと世に訴えたのは、一般に中産階級に生まれ育ち、豊かな教養を培った女性たちであった。

このような社会的・文化的土壌の中で、コンセプションは知識人にたる能力を身につけ、女性の擁護を訴えた。彼女の才気はひとときわきま出していた。彼女は女性向けの雑誌への執筆をひかえ、日刊新聞の『ラ・イベリア』や『現代スペイン』、その他クラウス哲学に傾倒したヒネル・デ・ロス・リオスが主催した「自由教育学院」の学術誌などに論文を投稿した。またヨーロッパならびにアメリカ合衆国の思想家などとも情報を交換し、同時代の思想の動向を把握するのに努め、フランス語とイタリア語に長じた能力を駆使して、国内はもとより外国の専門誌にも論文を書き送った。内外の学術会議にもそのつど出席し、彼女が折々に提起した論点には、将来の問題を予見するものも含まれていた。

コンセプションの関心事は末広がりには開いた扇のように多岐にわたった。中でも刑務所法と看護医療の分野は彼女の最大の関心事であった。これらの視点から、国民、労働者、孤児、女性を取り巻く状況を見つめ、危惧の念を抱き続けた。コンセプションは、自由と正義と愛徳の理念に基づき、各種の団体を組織し、幾多の刊行物を世に送り、足しげく女囚刑務所を訪れ、あまたの組織や団体と協力してみずから立案した事業の実現に奔走した。カルサーダの言にしたがえば、コンセプションは徹底して自由主義者であり、スペイン初の再生主義者であった。彼女は当時のヨーロッパの知的状況を危惧のまなざしで見つめていた。スペインでは、哲学者ならびに教育学者として名声の高かったヒネル・デ・ロス・リオスやグメルシンド・デ・アスカラテラと親交を深めた。彼女の個々の人間に対する態度はキリスト教の教えに基づき、社会観は社会主義思想によって立ち、国家観は自由主義の思想に根ざしていた。コンセプションは人の道のことわりに特段の関心を払い、その確立を信仰の力に委ねた。二十世紀も終盤にさしかかると、神の存在を問うよりも人間の主体的生き方やかわり方を重く見る信仰態度が日常化するが、コンセプションの信仰心もそれに通ずるものがあった。慈悲心と隣人愛を世界に説き広めることにおいて、キリスト教は大きな役割を果たしてきた。コンセプションの数々の着想は、おおむねカトリックの教えに基づくものであったが、中には公認された教義に含まれない要素もあった。

父親が残してくれた書物のおかげでコンセプションは早くから犯罪というものに関心を抱くようになり、それが刑法や心理学といった分野に造詣を深める契機となった。刑務所、孤児院、精神病院などを渡り歩く人物を扱った彼女の作品群では、『犯罪者へのたより』、『刑務所の研究』、『受刑者を訪ねる人』と題された三部作が秀でていて、これらの作品の中に、コンセプションは刑法に関する独自の思想を体系化した。当時のいずれの学派にも属さない独自の思想が織り込まれたこれらの作品は、彼女の著作集の中でもっとも価値ある地位を占める。コンセプションの思想はたちまちあまたの国々に知れわたることとなった。二巻に及ぶ彼女のもう一つの作品『社会の問題』も、前者と同様に、広く流布した。コンセプションは、社会の改革者として、様々な活動を率先し、法律の制定に向け

て数々の提案を行う。労働者の経営参加を促す活動を展開し、社会保障制度の確立を模索した。また独自に立ち上げた慈善団体の力を結集し、貧困者のための家屋の建設にも乗り出した。彼女がみずから起草して法律の制定を促したものの中には、慈善事業計画法、痴呆症救済法、家族遺棄犯罪法などといったものがある。他には刑務所監督庁や恒久窮乏者支援会議の創設、社会救済事業を顕彰する勲章の制定なども当局に要請している。理不尽な社会慣行や団体組織の不効率な運営には、厳しい態度で臨んだ。コンセプションは平和主義を徹底して擁護した信念の人であった。

教育の分野でもコンセプションの功績は他に抜きん出ている。女性と社会に愛情を込めて書き上げた彼女の著作には、文化の質の向上を願ってやまなかつた彼女の思いが込められていると言えよう。彼女の視線は常に市民社会に注がれ、大衆の側に立つ姿勢を堅持し、労働者の経済生活の向上に心を砕いた。人間の質と威厳を高め、より良民の教育』(二八七八)、『女性の教育』(二八九二)、『ハーバート・スペンサーの体育・知育・道徳教育に関する評論』(二八八二)、『労働者の啓蒙教育』(二八九二)などがある。

女性の地位の向上と福祉のためにコンセプションが身を挺して尽力した仕事と活動についてここで触れておかなければならない。彼女は、いろいろな意味において、スペインにおける女性運動の口火を切った人物の一人である。コンセプションによれば、女性は社会から疎外された存在であり、その償いとして社会は女性に対して敬意を払うと同時に支援を行う責務があった。事の処理にあたっては、女性をあるがままに受け入れ、女性に対して人間としての尊厳と教育を受ける機会を保証してやるのが肝心であり、男性側を論理に基づく礼節や経済的庇護の精神などは問題を解決する方策に値しなかった。コンセプションは、『未来の女性』(二八六九)と題した著書の中で、民法には男性優位の思想が貫かれているにもかかわらず、罰則条項に男女の違いが明記されていないのはおかしいとだと批判している。また道徳心についても触れ、女性はもともと男性よりも道徳的であるが、教育の欠如は、人

間としての柔軟性や生きて行くうえで、の生気を女性から奪いとってしまうだけでなく、思考力の低下を招き、果ては売春を誘発する要因ともなると主張する。一方、こうした事態は、思慮に欠け、迷信深く、感傷的で不器用な女性を社会は抱え込むことを意味し、それは男性にとつても好ましいことではないと考えた。この作品においてコンセプションは、政治、司法職、軍隊を除く、すべての職業に女性が参画することを推奨した。彼女が政治と司法と軍隊を女性の職業から排除したのは、女性には生来の優しさがそなわっており、それがためにこれらの分野では女性には男性に太刀打ちできないと判断したためである。

この作品から十年が過ぎた頃、コンセプションは『家庭の中の女性』(一八八三)を執筆し、彼女が『未来の女性』の中で述べたいくつかの考えを訂正している。そこでは彼女の女性観に一抹の悲観論がさしこみ、女性の知的能力を男性のそれと同等視する考えに疑問を投げかける。それでも、両者の違いは結局、教育に派生するものでしかなく、知力においては男性も女性も同等であるとする認識にいたる。女性の職業教育については、各個人の能力と感性を考慮し、相応の指導を行うべきであると説いた。芸術や手仕事の伝授にあたっては、このような教育的指導が多分に求められよう。コンセプションによれば、女性が家庭に留まることが理想とされたのは過去のことであり、女性は今や社会の諸々の活動にも積極的に参画しなければならぬとされた。一八九二年、彼女は『女性の教育』と題した自著に基づき一通の報告書を作成し、監督官庁に提出している。官庁側の消極姿勢にもめげず、コンセプションはいち早く女性の教育に最大の考慮を払うように要請したのである。その頃のコンセプションは、膨大な調査研究を必要とする自分自身の研究をひとまず棚上げにし、目的が達成されそうな社会奉仕の仕事に専念した。コンセプションが女性の職業について著述した他の作品には、『スペインにおける女性の現状』(一八九五)、『女性の職業について』(一八九一)、『家事労働について』(一八九一)などがある。

コンセプションの多彩な論考は自由教育学院が発行した学術誌、日刊新聞、女性雑誌などに掲載され広く流布し、女性教育に理解を示す運動の推進に役立った。彼女が訴え、主張した論点の数々は極めて説得力に富むものであつ

た。彼女は自らの体験に基づき、労働市場における女性の短所と長所を見抜いていた。先にも言及したようにコンセプションは文学の創造にも意欲を燃やした。彼女は決して凡庸な文筆家ではなかつた。ただ彼女の文学作品には、彼女が培った教養の域を逸脱する一面があり、思想においても思いつきの域を出ないものなどがある。修辭学と韻律学を修めた彼女は、韻文を操る術に長けていたが、彼女の詩は美しいことに独自性に光るものがなく、おおむね味わいに欠ける。コンセプションの若かりし頃にはロマン派の文学がもてはやされたが、彼女はこの種の文学とは肌が合わなかつたようだ。したがって彼女の作品には、慎重さと濃厚な合理主義的態度が貫かれ、その筆法は極めて技巧的で装飾的である。彼女の表現に唯一感情のほとばしりからくる揺らぎが生じるのは、筆者自身が他者について語るときだけである。コンセプションには未刊行となつた小説『ある人物の物語り』、散文詩『寓話』、抒情詩『美德の年代記』といった作品群もある。他には大衆歌劇『ペラーヨの息子たち』、演劇『苦惱と謎』、加えて種々の案内書の類もあるが、これらの作品は彼女の全集には収録されていない。

彼女の著作、中でもとりわけフェミニズムや社会参加を謳つた作品の多くは、今となつては単に歴史的意義を有しているにすぎない。その理由は、かつてコンセプションが試みた論考の多くが、現今では常識の範疇にとどまるものであるからである。彼女が主張し訴えたもののなかには、これまでに根拠が不十分だとして退けられたものもあるが、いまだに今日的意義をはらんだものもある。ともあれコンセプションは、十九世紀という時代にあつて、女性として最も偉才を放つた人物の一人であつたといえる。

コンセプションの著書

『慈善と博愛と福祉』(一八六一年)、『未来の女性』(一八六一年)、『軽犯罪者たちへのたより』(一八六五年)、『ある労働者へのたより』(一八七一年)、『戦争の光景』(一八七四年)、『ある名士へのたより』(一八七五年)、『家庭の女性』(一八八一年)、『受刑者を訪ねる人』(一八九三年)、『組織犯罪』(一八九三年)、『恒久的窮乏』(一八九

七年、『平等』（二八九八年）。一八九四年、息子フェルナンドは、母コンセプションの全集の出版をマドリードで手掛け、同全集の出版は一九二四年までに二十三版を重ねた。

（上間篤訳）

ロサリア・デ・カストロ

—— 詩人に化身したガリシアの魂

大畑勝代

関西外国語大学短期大学教授

サンティアゴ・デ・コンポステラの夜

イベリア半島の西北端に位置するガリシア地方は、山々が海からの湿った空気をさえぎり雨をもたらすため緑が豊かで、肥沃な谷、松やユーカリの森、霧に煙るなだらかな丘、影に溶けるやわらかな光はいつも文学や芸術の背景となってきた。そのガリシアが人のかたちをとったのが、スペイン・ロマン主義を代表する詩人の一人であるロサリア・デ・カストロである。彼女はガリシアの美しい自然とそこで暮す人々の悩みや悲しみを自分のものとして生き、生の苦しみと孤独を抒情あふれる詩へと昇華させた。ロサリアの生涯を概観してみると、外面的な運命は苦勞が多かったかもしれないがとりたてて言うほどの波乱もなく彼女の上を過ぎて行き、スペインの片隅で妻として母としてひっそりと生きた一生であった。しかし、内面では情念の嵐に翻弄されながら、生きることの深い根源を洞察して、『ガリシアの歌』、『新しい葉』、そして『サル河のほとりで』と次々とすぐれた作品を生み続けて彼女自身の内なる運命を切り開いていった。

ロサリアは、サンティアゴ・デ・コンポステラで一八三七年二月二十四日の寒い雨の夜に生まれた。ガリシアは